

# 成島柳北『伊都満底草』評釈稿(一)

高橋 昭 男

## はじめに

文久三年(一八六三)八月、將軍侍講・成島柳北は幕閣の因循を諷したかどで、その職を解かれ、閉門を命ぜられた。閉門そのものは五十日の達しであったが、職に復帰はかなわず、慶応元年(一八六五)九月歩兵頭並に任ぜられるまで、あしかけ三年にわたり屏居を余儀なくされる。ペリー来航による開国から十年、幕府崩壊の危機がせまるなか、かねてより儒学への有効性に疑義をいだいていた柳北は、屏居にともなう幕閣との隔絶を絶好の機会ととらえ、洋学への志向に大きく舵を切っていく。オランダ語の学習を手始めに、やがて英語の学習にまで及んでいく柳北は、洋学者たちとの交流を頻繁に行なう。

文久三年八月九日に起筆され、元治元年(一八六四)六月十三日までの柳北の日記『投閑日録』には、柳北邸を訪れた洋学者たちの名前がしばしば登場する。將軍侍医で代々続く蘭医の桂川甫周、語学の天才とうたわれた柳河春三、蕃書調所の教授神田孝平、同じく

算作秋坪、化学者の宇都宮三郎など、当時の先端を行く洋学者たちである。

現代の見方からすれば、洋学者というイメージはどこか真面目で堅い印象をもたらすが、実は彼等は風流韻事を愛する文人たちでもあったのである。柳北邸での会合は芸妓を侍らし、漢詩や和歌(実際は狂詩や狂歌)を披露し合う、お楽しみのサロンでもあった。

いつまで草四巻 此草紙ハ余ガ青年ノ比柳春三桂月池等の人々と會合スル毎ニ各自筆トリテ見聞キシコトヲ書キタル反故ナリ

〔花月新誌〕第十七号「土用干ノ記」(第二)

柳北が回想しているように、『伊都満底草』は、洋学者たちの柳北邸での会合で交わされた詩文の覚書である。ちなみに、柳春三は柳河春三、桂月池は桂川甫周を指す。慶応元年(一八六五)の元日から、おそらく慶応二年の一月中までの一年間余りの記録である。残念ながら原本は失われており、現在では本評釈で底本として使用する

る『柳北全集』(明治三十年・博文館『文芸倶楽部』臨時増刊)中の翻刻によるしかなないのであるが、その『柳北全集』の「柳北先生略年譜」に次のような記載がある。

慶応元年 戲筆「伊都満底草」。成於屏居三年無聊之餘云。

「無聊の余り」とあって、大半は閑文字を連ねた詩文集と違って差し支えない。まさに「うつけたる事のみ好める」(後出)態の内容である。

そもそも文人サロンは俗世間の価値とは別の価値に基づく、文雅を媒介とした精神的な共同体として生れ出たものであった。

(揖斐高『江戸の文人サロン』二二頁)

柳北邸のサロンも、ここに示された性格をそなえたサロンであるのに違はないが、江戸の春を謳歌した太平の世はすでに終わりを告げ、風雲急を告げる政治情勢の中での、洋学者たちの息拔きの場としての性格の方が勝っている。したがって、ここに見られる文事には、「雅」よりも「俗」の方に強く傾斜しているのが特徴である。さらに表現方法が、狂詩、狂歌、和歌、俗謡、戯文などきわめて多岐にわたっており、他にあまり類例を見ない詩文集になっている。

屏居中も柳北は日記をつけたが、慶応元年(一八六五)一月元旦

から慶応二年十二月末までを記録した『春声楼日乗』(大島隆一『柳北談叢』六〇頁)を始とする以降の日記はすべて失なわれている(但し『航微日記』と『航西日乗』は刊本に載る)。その意味でも、この時期の柳北の動向を知ることの出来る貴重な文献と言えよう。

『柳北全集』の編者岸上質軒は、凡例で次のように言う。

一時の名流にして西洋の學に通ずる諸士を家に招き。妓を聘し酒を置きて之を款待し、而して先生は英書を樓上に讀み、解せざるあれば諸士に質し、倦めば則ち共に酔ふ、一部の伊都満底草四卷は則ち、此際諸士と共に酔餘各々筆を把りて、互にその本事を録したるもの也。故に隱語あり謎語あり、解すべく解すべからず、その匿名の誰氏たるも亦今推し難き多し。

会合の雰囲気がよく伝わる紹介である。「先生」は柳北を指す。詩歌の応酬に入る前に、英書の質疑や、おそらく当時の社会状況を鑑み、さまざまな情報交換がなされたことであろう。また「隱語あり謎語あり」とするのは、「酔餘各々筆を把」った詩文に、仲間内だけで通じる楽屋落ちと見られる表現が多いことを指している。たとえば、侍らせている芸妓の名を詠み込んで誰かに宛てつけることなど、しばしば見られる。また、「匿名の誰氏たる」とするのは、作者の本名が一切使われず、雅号が用いられていることを指しているのだが、その場限りの使用例もあるようで、柳北、春三にいたっては、十五

通り以上使い分けられていると思われる。前田愛氏をして

柳北をとりまく洋学者たちの楽屋落ちが縦横に錯綜し、一人がいくつもの変名を使っていることもあってその解説はきわめてむずかしい。

（朝日選書『成島柳北』一三二六頁）

と言わしめたほどで、これまで本文の解説作業は殆ど行なわれていない。

なお、同様の会合は柳北の畏友桂川甫周邸でもしばしば催されており、メンバーもほぼ共通していたようである。その際の詩文の応酬の覚書として、『隨身卷子』が遺されており、こちらは原本が早稲田大学図書館に現存する。良質の美濃紙を二つ折にしてこよりで二か所を綴じたもので、縦二七・五センチ、横十九センチである。おそらく『伊都満底草』もこれと似たような体裁の手稿本であったろう。『隨身卷子』は、慶応元年七月十七日をもって起筆され、慶応二年九月十九日の日付をもつ記事で擱筆されている。すなわち『伊都満底草』とは半年強のズレをもつて書き始められ、書き終えられている。内容的には『伊都満底草』と同様であるが、唯一、日付の入った記事が時折り散見されることが、同時期の柳北の日記が失われている現在、柳北の動向をわずかではあるが知るよすがとなる意義は大きい。さらに特筆すべきことは、『伊都満底草』に散見されるものと同じ作が多く記録されており、その作の成立の背景が時には具体的に記されているので、『伊都満底草』解説のための重要な資料ともなっている。

るのである。

『隨身卷子』については、今泉源吉氏の著『蘭字の家 桂川の人々』の最終巻に詳細な解説があるが、『隨身卷子』のすべてを紹介してはおらず、掲載を漏らしたなかにも、『伊都満底草』解説の手掛かりが遺されている。しかし、今泉氏のこの労作がなければ、本評釈を書くことは不可能であった。このことを強調しておきたい。ちなみに今泉氏は、桂川甫周の次女であるみねの息であり、みねは桂川甫周のサロンを活写した『名ごりの夢』の著者でもある。

#### 凡例

- 一、底本は、『柳北全集』所収『伊都満底草』（博文館発行『芸芸倶楽部』明治三十年刊）を使用した。なお、今回は『伊都満底草』巻一のみを取りあげ、「評釈稿（一）」とした。
- 一、翻刻にあたっては、次のような方針で行なった。原文はすべて二字下げとした。字体、振り仮名、傍線、傍点、返り点などはすべて底本通りとするが、句読点、濁点は文意によって適宜補い、詞書や注などには、新に句読点をほどこした。また漢詩文の訓読は、通行の字体を用いた。
- 一、本文は原文（漢詩文は訓読を付けた）、語注、評釈の順であるが、解説不能の作については留保した。
- 一、原文は○印をもって一作としているので、便宜上、巻ごとに①からはじまる通し番号をつけた。

一、擬名(匿名)の作者の特定については、次の表を基準とし、擬名の初出する作の語注で理由を記すが、作者不明の作については、今後の課題とする。

擬名一覽 (一)内は相似する雅号

成島柳北	誰園(誰その、あるじ)	誰園主人	誰園漫士	誰園生
唯好(た、好の朝臣)	たゞ唯好の朝臣	唯好朝臣	無趾仙	鴨
齋主人	鎖春仙史	小通仙(小通)	可愛叟	情痴生
桂川甫周	早樹(寢覚の早樹)	寢覚早樹	はやき	寢さめの早樹
晴蓑	愛竈(愛竈子)	臥孟二世(臥孟第一)		
柳河春三	春蔭(柳の屋のあるじ春蔭)	春影)	喫霞仙客(喫霞楼)	
仙客	武昌喫霞仙史	仙客	喫霞小僊	臥孟(臥孟生)
	(柳屋の主人淑麿)	きのよしまろ	よし麿	きのよし麿)
	生	藐姑射仙人	洮孫生(洮孫)	
神田孝平	唐通(唐通居士)	河淮経略姑蘇監田唐通		
箕作秋坪	伊賀麻呂(栗のやの伊賀麻呂)	小湖山人		
水品楽太郎	多喜兒(多喜子)			
不明	田子の浦人	さかきたか郎	苦屋の千鳥	靡糸
			遁窟居士	小
林氏	遁窟	千子	蓋係	鼻撫宿祿
			濯娘	字子
榎	歩柳	繁華女史	烏有居士	無常斎
			むさし野の花子	鶴
	浜女史	岐山処士	紫老	鳥子
			あき子	あや子
			かつら子	(一
	名政子)	万真	桃花生	香雪山人
			河氏女禽兒	さたむる
			子	

大野 禽兒 万子 每兆生 楽窩生

\*『伊都満底草』に記述されている作品数は○印が合計219であるが、一つの○印に複数の作が記述されている場合もある。作者別の作品数の内訳は次の通りである。

成島柳北	44作
桂川甫周	50作
柳河春三	57作
箕作秋坪	4作
神田孝平	2作
水品楽太郎	3作
不明	81作(擬名が不明のほか、無記名、詠み人しらずを含む)

不明の81作の特定がどこまで出来るかが課題であるが、『伊都満底草』は柳北・甫周・春三の三人が中心であることは明白である。  
\*桂川甫周の『隨身卷子』の原本は、早稲田大学古典籍アーカイブスより複写した。判読に困難な箇所もあるが、これも課題である。

## 伊都満底草卷之一

この草紙をかく名づけたるは、ある人の、おこと等はなごて、かくいつまでも、うつけたる事のみ好めるにやと、詰りしことのありけるを。思ひ出しまゝ、かく定めけるになむ

乙丑の元日何となく春の聲する高どのに

誰そのゝあるじしるす

### 〔語注〕

○ある人 Ⅱ 諸本から推定すると、福沢諭吉の可能性がある。福沢は柳北邸には殆ど来ていないが、甫周邸には、住居が近いこともあつてしばしばあらわれた。柳北の洋学者仲間の一人としてみてよい。○おこと Ⅱ 相手に対して親愛の心をこめて呼ぶ語。御身。そなた。○うつけ Ⅱ 空。虚。からつぽ。おろか。○乙丑 Ⅱ 慶応元年。○春の声する高との Ⅱ 春声楼。柳北の書斎の号。○誰そのゝあるじ Ⅱ 「誰その」は誰園で、柳北の下谷の邸の庭の名。訓みは「たがその」であり、柳北をさす。

### 〔評釈〕

『伊都満底草』の名称の由来とする、「うつけたる事」云々の発言者を福沢諭吉と考える理由の一つは、巻の二の冒頭にある柳北邸での会合の折に、福沢が社中の留めるのも聞かずに退席したエピソード。そして桂川甫周邸での洋学者仲間の会合を回想した次のような証言である。「そうして福沢さんは、どうも遊び仲間とはちがうように私の頭にのこっています。始終ふところは本で一ぱいにふくらんでいました。いつも本のことばかり心に掛けて、桂川から洋書をかりていらつしやいました」（今泉いね『名ごりの夢』三四頁）。「かくいつまでも。う

つけたる事のみ好めるにや」と「ある人」に言わしめた、柳北と洋学者たちのサロンにおける行為は、いかなる状況を背景にもつのであろうか。彼等の心情を前田愛氏は次のように推測する。

下谷の成島邸、鉄砲洲の桂川邸は、いわば攘夷の嵐が頭上を吹きすぎるのを待ち望む洋学者たちの避難港であつた。またかれらを翻訳職人として酷使するばかりで、その豊富な洋学の知識を活用しようとはしない幕府上層部への不満を発散させる場でもあつた。成島邸や桂川邸で演ぜられたかずかずの「うつけたる事」は、逆にかれらをとらえていた憂悶の深さを証しするものでなければならぬ。『伊都満底草』の陽気な言葉あそびは、その背後に思ひのほかには、苦い心をかくしていたのである。もちろん、かれらの内面に演じられた劇におのずから深淺があるのは当然であつて、おそらく「無用の人」の自意識にもつとも醒めていたのは、主人役の甫周と柳北であつた

(前田・前掲書一四二頁)

① 元日朝まだきより、例の人々唯好のもとにつどひける折、扇にものかけとありければ 田子の浦人

青柳を東風の相手と定めけり。

〔語注〕 ○朝まだきⅡ朝、まだ夜が明けきらない時。○唯好Ⅱ柳北を指す。○例の人々Ⅱこの頃、柳北邸に集まつた洋学者グループ。桂川甫周、柳河春三、神田孝平、箕作秋坪など。○田子の浦人Ⅱ不明。○東風Ⅱ春に東から吹く風。

こち。○傍点の付いた「と」と「り」||とり↓鳥で、柳北が馴染んだ柳橋の芸妓お鳥を詠み込む。

〔評釈〕 元日の早朝より、いつものメンバーが唯好の邸に集まったと記されているように、柳北邸での洋学者たちのサロンはかなり以前から行なわれていたようである。ちなみに柳北が蘭学をはじめるのは文久三年八月十一日の『投閑日録』に「余本日讀蘭文典」とあり、文久四年一月十日の同じ日記には「英学起業」とあって、英学も柳河春三、神田孝平らに学び始めていたようである。また次のような証言がある。「このとし二月十九日から、(慶応元年の『春声樓日乗』には) 曜日をみな、英語で書いている」(大島・前掲書六〇頁)。

風に柳は決り文句だが、お鳥さんには柳北(青柳)さんというこち(東風)の人(相手)がお決りでしたよね、といった挨拶の句である。

② 年毎のためしなれど、去年のくれはことさらに恐ろしげなる鬼どものいで来て、ふくろの物みな奪ひ去にければ、この春淋しく覺へてかくはよめりける  
たゞ好の朝臣

梅櫻いかに咲ともやま吹のはななき宿は淋しかりける

〔語注〕 ○鬼||催鬼。借金とり。○ふくろの物||財布のなかの金。○たゞ好の朝臣||唯好。柳北のこと。○やま吹|| (山吹色の) 金のこと。太田道灌の山吹の里の故事にかけている。ちなみに、「七重八重花は咲けども山吹の実のひとつだになきぞかなしき」は、中務卿兼明親王の歌。

〔評釈〕 柳北は旗本であるから、屏居して無職の間でも扶持はあったが、収入減であることに違いはなかったであろう。しかし、手元不如意とまではならなかったのではないか。正月に詠んだ歌だけに、暮れに押し寄せてきた借金とりの攻勢が、なまなましく思っておこされたのであろう。

③ おなじ年の元日つとめて、起出けるをり、よめりける

柳の屋のあるじ春影

麗うらくくと匂ふ朝日の影みれば今年も春は長閑なるべし

なをいかばかりうかれありきつらん、おぼつかなしや

〔語注〕 ○柳の屋のあるじ春影ハルカゲ 柳河春三をさす。柳河春三は、天保三年（一八三二）～明治三年（一八七〇）。名古屋に生まる。元治元年（一八六四）開成所の教授に就任。洋書の翻訳に努める。慶応三年（一八六七）には、我が国最初の雑誌『西洋雑誌』を刊行、翌明治元年には『中外新聞』を発行する。語学の天才といわれた。

〔評釈〕 正月を寿ぐ歌であるから、「今年も」長閑な春であろうというのだが、現実の世の中は、天狗党の乱が平定されたばかりであり、長州の動向は一時の油断も許されない状況下にあつた。無論、春三とてこうした情報は承知の上である。それはそれ、これはこれ、正月の目出度い気分を、謳歌しようではないか、というのである。

④ かつていひよりける女の、おとこをば子日の松と同じさまに引つゝ遊ぶ心のありて、いとくにくけれ



ば、今年は逢まじと思ひ定めて、春のはじめ、消そこのはしにかきて遣はしける 　　たゞ好の朝臣

我宿に黄金なるてふ樹を植て花さく後は逢んどぞ思ふ

〔語注〕 ○子日ね子の日。正月の最初の子の日をいうことが多い。この日、野に出て小松を引き若菜を摘み、遊

宴して千代を祝う。○消そここ消息。手紙のこと。

〔評釈〕 かつて自分が言い寄った女とは、柳橋あたりの芸妓であろう。子の日の松を引くように、男心を弄ぶ憎い女に宛てた手紙のはしに書き付けた歌という体裁にしてある。今年はお会いしないと決めた上で、あなたとはお金の関係なので、お金が出来たら会おうと言いつつも、実際はもうこれきりにしようとは伝えている。

⑤ 戀の歌よみける中に 　　寢覺の早樹

とりがねも絶ず聞えて嬉しきはみ山隠れぬ我身なり梟

〔語注〕 ○寢覺の早樹ハルマ桂川甫周のこと。桂川甫周は、文政九年（一八二六）～明治一四年（一八八二）。江戸に生まる。家代々の將軍侍医。写本の蘭和辞書「ズーフ・ハルマ」を、安政元年（一八五八）『和蘭字彙』と題して刊行。維新後には『東京医事新誌』を編刊した。○とりがねね「鳥が音」で鳥の鳴き声。これに「鳥」と「兼」という

柳橋の芸妓の名を詠み込んだ。○梟ケけり。助動詞「けり」の宛字。

〔評釈〕 我身は深山に隠遁してゐるわけではないので、鳥の鳴き声がいつも聞こえてくるのは（お鳥とお兼の声がいつも聞えてくるのは）、嬉しいね、といった歌意か。甫周邸のサロンにも、芸妓が出入りしていたことは、『名ごりの夢』にしばしば語られている。

⑥ 春のあしたよめる

栗のやの伊賀麻呂

つくばねの落ちてはあがる中空に猶（まだイ）いとけなき春は来にけり

〔語注〕 ○あしたア朝。○栗のやの伊賀麻呂イ箕作秋坪のこと。箕作秋坪は文政八年（一八二五）～明治一九年（一八八六）。津山の生まれ。蘭学者箕作阮甫の養子。安政六年、蕃書調所教授手伝。文久元年（一八六四）、ヨーロッパへ出張。維新後、明六社結成に参加す。○つくばねウ衝羽根。追ウ羽根。○（またイ）ウ異本には「猶」のところが「まだ」と記されているという意味。

⑦ むかし契りし人に讀て遣はしける

早 樹

いかにせむ人の園生の姫小松ひくも心の儘ならぬ身は

〔語注〕 ○読むⅡ歌を詠む。○姫小松Ⅱ子の日の小松引きにかけて、他人のものになった女をいう。

〔評釈〕 園生の姫小松が「誰園生」の姫小松となると、すでに柳北の側室となつているお蝶ということになる。そうすると、仲間内での遊びには、ある種の暗黙のルールがあつて、この場合、柳北の側室に甫周が懸想する内容の歌であるが、あくまで遊びの許容範囲ということなのであろう。

⑧ 題しらず

春 影

ひとり立岸の岩根の姫小松かねて千とせの陰はみに梟

〔語注〕 ○「とり」「かね」「千」Ⅱともに柳橋の芸妓を詠み込む。

⑨ 唯好のもとにてよめる

さかきたか邨

今日もまた涎たらしてすぎにけり

〔語注〕 ○さかきたか邨Ⅱ不明。○涎をたらすⅡ美しいものなどを見てかわいい、ほしいなどという気持の強くなるさまにいう。

〔評釈〕 さかきたか邨は⑩では榊たか村に宛てているが、柳北、甫周以外の人物であり、春三あたりであろうか。

⑩ 榊たか村の問けるは、古よりいまだたれを竹帛にしるす事をきかずと。其折早樹の、古人いはずや、功名を竹帛にたるゝと答へしかば  
苦屋の千鳥

竹帛にたれてうれしき浮名かな

〔語注〕 ○竹帛にたるゝ竹帛は書物、特に歴史書。竹帛に垂るは、文字に書き残す、功名や手柄が書きのせられて後世にまで伝わるの意。○苦屋の千鳥〓不明。

〔評釈〕 詞書の「たれ」は「誰」ではないであろう。竹帛に「垂る」と掛けており、女との浮名が文字で伝わるとしたら嬉しいことだ、という句意からすると、「たれ」は落語家などがよく使う、「女」の隠語に相当するか。⑨の「涎たらして」によつて、⑩の「竹帛にたれて」が引き出されると見れば、⑨と⑩は関連があり、⑨は柳北の邸で詠んでいるので、⑩の苦屋の千鳥は柳北かもしれない。そうすると、さかきたか邨は春三あたりかと推測される。

⑪ ある園の梅を見てよめる

靡 糸

夜は風につてな忘れそ梅のはな

〔語注〕 ○ある園〓柳北郎の元旦の集いで詠まれた句であるから、柳北郎の庭である誰園である。○靡糸〓不明。

〇つて〓ことつて。

〔評釈〕 菅原道真の「東風吹かばにほひをこせよ梅の花あるじなしとて春な忘れそ」の古歌を踏まえた句である。

⑫ 新撰長恨歌録三

喫霞樓仙客

いろになるみの襦袢もぬいで

春寒賜レ浴華清池 温泉水滑洗レ凝脂

すはだ自慢の夏の富士

まつにしのんで夜長の秋を

遅々鐘鼓初長夜 耿耿星河欲レ曙天

あかしかねたる床のうち

義理をかいてもかうなるからは

在<sub>レ</sub>天願作「比翼鳥」 在<sub>レ</sub>地願作「連理枝」

あくまで女房にもつこゝろ

〔語注〕 ○新撰長恨歌録三〓白居易の「長恨歌」中の三聯を撰び、都々逸風のパロディに仕立てている。桂川甫

周の「太平春詞」（早稲田大学図書館蔵。今泉源吉『桂川の人々』最終篇所収）に同じ趣向の作例がある（後出）。

○喫霞樓仙客〓柳河春三のこと。〇いろになるみの襦袢〓情人（イロ）に鳴（成る）海絞りの襦袢。

〔評釈〕 一聯目。春寒浴を賜ふ華清の池。温泉水滑かにして凝脂を洗ふ。楊貴妃が華清池の温泉につかっている妖艶な姿を、夏の富士の雪解けの山容に見立てて、藍染めの襦袢をさらりと脱いだ女の素肌に例えている。二聯目。遅々たる鐘鼓初めての長さ夜。耿耿たる星河<sup>おほほ</sup>と欲するの天。秋の夜長ひたすら玄宗を待つ楊貴妃の悶々とした気分を、情人を待つ妓女に見立てる。三聯目。天に在りては願くは比翼の鳥と作り。地に在りては連理の枝と作らんことを。玄宗と楊貴妃の固い絆のように、世間の義理を欠いても相手の女を女房にしようという、男の女に対する強い愛情表現をあらわしている。

\*参考「太平春詞」

鳥も通はぬげんかい灘を

雲耶山耶呉耶越 水天髣髴青一髮（頼山陽「泊天草洋」）

誰をめあてにかよはんす（二十三裏）

(この作について、今泉源吉氏は「山陽の有名な詩を入れたあたり、柳河作らしいにおいがする」と注している)(今泉源吉・前掲書二五一頁)

月夜からすにふとめをさまし

姑蘇城外寒山寺 夜半鐘聲至客船 (張繼「楓橋夜泊」)

身二つまさされてなきねいり (二十四表)

かたい約束のちのよかけて

在<sub>レ</sub>天願作<sub>二</sub>比翼鳥<sub>一</sub> 在<sub>レ</sub>地願作<sub>二</sub>連理枝<sub>一</sub>

とはいえ女房のあるおまへ (二十四裏)

⑬ 戀の歌よめと人のいひければ

唯好の朝臣

我か戀はすまの浦半のとも千鳥かよふ浪路の關守や誰

〔語注〕 ○戀の歌の本歌〓「淡路島かよふ千鳥の鳴く声にいくよ寢覺めぬ須磨の關守」(源兼昌「金葉集」冬二七〇)。○浦半〓浦回。入り組んだ海岸。浜辺。○とも千鳥〓友千鳥。群れ集まっている千鳥。「千」と「鳥」

は芸妓の名。

〔評釈〕 源兼昌の名吟を本歌にしている。「須磨の関守」は屏居中の柳北が芸妓のもとに通うのを邪魔する人であり、自分の恋路を邪魔する者は誰であろうか、という意味である。柳北は時には外出もしたようである。「(先生) 閉門を命ぜらる、居柳原の北にあり、頗る柳橋と相近し、先生乃ち家門を閉じて別に邸後に小門を開き、屢々酔を柳橋に買ひ、云々」(岸上質軒『柳北全集』凡例)。

⑭ 早樹によみて贈りける

春 影

鯨レとる舟人きくやみくまの、浦半の月に千鳥レなくこゑ

〔語注〕

○鯨レ通常、和歌ではイサナと訓むところだが、ここではクジラと訓みたい。鯨は柳橋の芸妓政吉の仇名。

○みくまのレ御熊野。三熊野。熊野のこと。あるいは、熊野三山のこと。○千鳥レ芸妓のお千とお鳥。

〔評釈〕 甫周あてに春三が詠んだ和歌であるが、舟人は甫周で、政吉ばかりに目をやらないで、お千やお鳥にも顔を向けるという心か。「政吉はもう年増の方で、何でも三十ぐらいの人らしく、すっかりしていました。うけ出して妾にしうなどと行われたいって行きません。(中略) それだけに芸があつて、みんなからねえさんねえさんといわれておりました。(中略) この政吉というのは芸者でも柳河さんとお友達になるぐらいの才がありました」(今泉みね・前掲書一九八頁)。



⑮ 春の夕早樹のもとへ消息遣はずとて

唯好朝臣

かくばかりうるさき物としらざりきおのこばかりの國や尋ねん

〔評釈〕この⑮から⑰までは、柳北と甫周の往復書簡に付けられた歌である。

⑯ かへし

早 樹

世のなかにおなごばかりの國もがなうるさき物は男なりけり

⑰ 同じ消息のはしに

早 樹

いせの海難波の橋の河風に友まどはせて千鳥なくなり

〔語注〕 ○いせⅡ伊勢であろうが、これも芸妓の名か。○難波の橋Ⅱ新橋の土橋近くに同名の橋があった。○伊勢と難波で、難波の葦は伊勢の浜荻（難波で葦と呼ぶ草を、伊勢では浜荻という。地方により風俗習慣が異なること）を踏まえるか。○千鳥Ⅱお千とお鳥で芸妓の名。

⑱ 春の歌よみけるなかに

春 影

岩根ふみあこがれ出て百千鳥さへづる山の梅や尋ねん

〔語注〕 ○「ふみ」、「千」、「鳥」、「梅」みな芸妓の名。

〔評釈〕 名前を挙げる芸妓たちを引き連れて、梅見に出掛けようではありませんか、という心か。

⑲ 花のもとに人々つどひける折よめる

遁齋居士

手の長き人はなけれどはなの下長き友垣あそぶ春の日

評者云、女には手の長き人も少からぬにや

〔語注〕 ○遁齋居士 〓 不明。○手の長き人 〓 手くせの悪い人。盗癖のある人。○はなの下長き友垣 〓 女に甘い友人。  
○評者 〓 柳北であろう。この評は、日頃つき合っている芸妓たちへの宛てつけか。男女の関係での手くせをほめかしているようだ。

⑳ 述懐の歌よみけるなかに

唐通居士

唯好朝臣

早 樹

伊賀麻呂

大任を下すつもりか積りなら我も其氣で一がまんせむ

大任を下さばせそれまでは我もゆるりと一ね入せむ

大任を下さばせくだすとも狸ね入りの我れは動かず

大任も屎もへちまもいる物かモ子一の外は我は動かじ

〔語注〕 ○述懐 〓自分の思いを述べる。言志。○唐通居士 〓神田孝平のこと。唐通は、「河淮経略姑蘇監田唐通」という擬名の略。神田孝平は天保元年（一八三〇）〜明治三十一年（二八九八）。美濃に生まる。文久二年（一八六二）、蕃書調所教授出役。のちに開成所教授、同頭取。『経済小学』を翻訳し、西洋経済学を紹介。○屎 〓くそ。○モ子一 〓マネー。

〔評釈〕 「大任を下す」の出典は、『孟子』告子章句下にある「故に天の將に大任を是の人に降さんとするや、必ず先ず其の心志を苦しめ、其の筋骨を勞せしめ、云々」と思われる。これに続いて次のようなくだりがある。「人恒に過ちて然る後に能く改め、心に困しむ慮に衝ちて、然る後に作り、色に徴われ声に発して、然る後に諭る。入りては則ち法家（法度の世臣）拂（補弼の賢士）なく、出でては則ち敵国外患なき者は、国恒に亡ぶ。」

然る後に憂患に生じて安楽に死するを知るなり。四人とも、『孟子』は必読書であつたから、ここに記されていることと、当時の政治情勢は他人事ではなかつたはずである。京都での攘夷派の跋扈という内患、欧米諸国への外憂、これらに対して幕府は軍制改革の必要にせまられる。そうした不安定な政治情勢のなかで、彼等はひそかに自らの出番が来るのを意識していたであろう。孝平、柳北、甫周、秋坪の四人が、大任が下りたときの身の処し方を述べる。蕃書調所の教授である孝平は、そのときが来るまで、今の役目を忠実にこなす。屏居中の柳北は、無役の身ゆえ、昼寝でもして待つしかない。將軍侍医の甫周は立場上、狸寝入りでもするしかない。蕃書調所教授手伝の秋坪は、幕府に見切りを付けたように、役職など欲しくもない、金をくれる方がはるかにマシという。それぞれが「述懐の歌」を狂歌に仕立てて、幕閣への憤懣を吐露し、心中の憂悶を笑いのめしている。

⑳ 春興

喫霞仙客

江村宜<sub>レ</sub>散步<sub>一</sub> 江村 宜く散歩すべし

正是暮春天 正に是れ 暮春の天

花發多<sub>レ</sub>風雨<sub>一</sub> 花発<sub>ひら</sub>けば 風雨 多し

天公不<sub>レ</sub>雨<sub>レ</sub>錢 天公 錢を雨<sub>ふ</sub>らさず

譯云 花のさかりに同じくならば。かねが天から降ばよい。

〔語注〕 ○江村Ⅱ川に沿った村。○花發多風雨Ⅱ于武陵「勸酒」詩の「勸君金屈卮。滿酌不須辭。花發多風雨。人生足別離」を踏まえる。○天公Ⅱ天帝。天の神様。

小林氏

散步開<sub>レ</sub>花節 散步す 花を開く節

江村欲<sub>レ</sub>暮天 江村 暮んと欲する天

一瓢傾<sub>レ</sub>尽後 一瓢 傾け尽す後

不<sub>レ</sub>復恨<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>錢 復た錢無きを恨みず

譯云 花の夕べに酔ひたる跡は。かねがなくても面白い。

〔語注〕 ○一瓢Ⅱ酒の入った瓢箪。○小林氏Ⅱ不明。柳北の同僚であつた侍講の小林栄太郎か。

無趾仙

何時能散步 何れの時か 能く散歩せん

困臥落花天 困臥す 落花の天

嗟彼蒼々者 嗟<sup>ああ</sup> 彼の蒼々たる者

奪<sub>二</sub>吾脚與<sub>レ</sub>錢 吾が脚と錢とを奪ふ

譯云 花の三月達磨で困る。あしとおあしがあればよい。

〔語注〕○無趾仙ニ趾（あし）が無い仙人で、達磨のこと。三年にわたる屏居で、行動の自由が束縛されてた柳北をあらわす。○蒼々ニ『莊子』逍遙遊に「天の蒼蒼たるは、それ正色か」とあることから、天をさす。○おあしニ錢のこと。

〔評釈〕②の春興と題された五言絶句は、三人の作者の一首ずつで、狂詩に近く、それぞれに都々逸による訳がつけられている。手元不如意の三人が花見をするという趣向である。江村を敢て比定すれば、隅田川沿いの向島あたりであろう。一首目は花に風はつきものだが、どうせ降るなら錢を降らしてくれと、あからさまである。二首目は夜桜に変わろうとする夕暮れ時、酔いも十分にまわって、風流の極み、錢がどうしたと、気分上々。三首目は都々逸訳が言いつくしている。天は我を見捨てたもうたか、と自らの境遇を歎く。

② 囊中自ら錢のなくなりければ

遁 崙

鍋釜にかなければかりの世たいかな

〔語注〕○囊中ニ財布の中。○かなけニ金氣。○世たいニ世帯。

②③ いたづらに過しを恨みて

早 樹

とりとめぬ物としりつゝ年月を仇に契りて我は過にき

〔語注〕 ○仇に契る〓仇に結ぶ。男女のかりそめの交わり。はかない関係。

〔評釈〕 ②③から②⑤までの三作の「とり」は、芸妓の「お鳥」であろう。三人三様のお鳥との関係を詠み合う。甫周は捕まえ損なつて、煮え切らないまま、何年になるのだろうかと悔やむ。

②④ 同じこゝろを

唯 好

言よるも遠山とりのしだり尾の長き月日を仇に暮しつ

〔語注〕 ○本歌〓「あし引きの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をひとりかも寝む」(柿本人麿)。

〔評釈〕 柳北は、言い寄つてははぐらかされるのは、毎度のことと飽きもせずよく続くよ、と自嘲する。

②⑤ おなじ心を

春 影

しばしだに手なるとならばからとりの立んうき名もおしからなくに

〔語注〕 ○手なる〓手馴る。手になじむ。扱いなれる。○からとり〓唐鳥で、鸚鵡などの外国産の鳥のことだが、ここでは空取引からとりひきに掛けて、実体のない男女関係を意味している。

〔評釈〕 春三は、ほんの少しの間でいいから馴染んでくれたならば、浮名が立つても惜しくはないのに、とため息をつく。

②6 すてられしを恨みてよめる

千 子

千里行く身をば思はでひばり毛の駒のみいかで人のめづらむ

〔語注〕 ○千子〓不明。仙史のもじりとすると、喫霞仙史の春三か。○千里行く〓「惚れて通へば千里も一里」を踏まえるか。なお「千里」と「駒(馬)とは縁語。○ひばり毛〓ひばりげ。雲雀毛。馬の毛色の名。黄と白のまだからで、たてがみと尾と背の中央部とが黒いもの。雲雀鹿毛。○「千」、「ひばり」、「駒」みな芸妓の名。

〔評釈〕 千里の道も遠しとせず、とまで思っている私を見捨てるお駒ばかりを、どうして人はもてはやすのか。

②7 むかし男ありけり。ある友のもとより。いとあざやかに粧ひし佩楯てふ物をかりて。久しくとどめ置け



るに。其友よりかへせとの消息ありければ。ひつのうちより取出て。きぬにつゝみにけるを。はした女のかいま見て。いち早く男の側女にさゝやきていふ様。あるじの君はいづこよりか。いとほでやぎし錦織の帯一すじとゝのへ給ひぬ。思ふにうたひ女に。そと贈り給ふなるらめと。うらやみ心に口さがなく語りしかば。その側女日ごろ野邊の若草つのぐむことをのみ。明暮の樂みとなせしおな子なりければ。そは口惜しといひつゝ。おのが胸も。かきさばくばかりのけしきして。あるじのかたへにはしり來にけり。あるじ何こゝろなく。おことはなにとてかくは息づきあへず。はしり廻り給ふにやと問ふに。なに事とおおこがまし。此きぬのうちこそ。いとも腹だゝしやとて。きぬかなぐりすてゝ見れば。こはいかにおのれもかつてみしらぬ物の具にてありければ。あまりに興醒て。はては笑に堪兼て。ころびありきにけり。その折あるじの口ずさみけるとて人の傳へける。

白黒の色目もわかぬはした女におどされたりや佩楯の糸

〔語注〕 ○佩楯ペイトはいだて。甲冑の小道具の一種。草摺と臙当との間の大腿部の防御具。歩兵用として室町時代から盛んに用いられた。○側女ソバメ。本妻以外で夫婦の關係にある女。側室。○うたひ女ウタヒメ。歌女。歌などでその場の興を助けるのを業とする女。芸者。芸妓。○そとソト。こつそり。○つのぐむツノグム。角ぐむ。芦やマコモなどが、芽を水上や地上に角を出すように出始めること。○かきさばくカキサバク。切り裂く。かつさばく。○息づきあへずイブキアヘズ。息づきは苦しそうに呼吸する。敢へずはこらえる。○おおこがましオオコガマシ。癩ににさわる。○おど

す<sup>わど</sup>「舊す」と「緘す」(鎧の札を糸や革などの緒で綴り合わせる)の掛詞。

〔評釈〕 柳北の氣に入りの文と見え、『花月新誌』十七号の「土用干ノ記」第二にこれと同じ全文が掲載されており、刊本では『花月新誌』が初出である。『伊勢物語』のパロディーであるが、初出も同様に作者名もなく、出典が明らかでないが、おそらく柳河春三の「似せ物語」の一部であろう。ただし、春三作「似せ物語」がどのような内容のものなのかは、ごく一部しか分からず、写本なのか刊本のかも不明である。尾佐竹猛著『新聞雑誌の創始者 柳河春三』にその一部の引用がある。「春三の「似せ物語」に むかし男ふるさとにありわびて、法師になりてものまなびにいでたつとてよめりける うしろ髪わがかしらにはなかりけり ひかるゝものや心なるらん云々」(『近代学芸資料叢書第九輯』一〇八頁)とあって、この作が存在したことだけは事実である。

⑳ 聞<sup>下</sup>社友携<sup>中</sup>四佳人<sup>上</sup>遊<sup>中</sup>江東<sup>上</sup>書<sup>レ</sup>之以寄

社友、四佳人を携へて江東に遊ぶを聞き、之を書して以て寄す

鴨齋主人

文壇若<sup>下</sup>卜<sup>中</sup>春遊地<sup>上</sup> 文壇 若し春遊の地を<sup>ほく</sup>卜せば

好鳥啼邊芳草繁 好鳥 啼く辺り 芳草繁し

〔語注〕

○社友<sup>下</sup> 柳北邸に集まる洋学者達か。○鴨齋主人<sup>上</sup> 柳北であろう。後出<sup>⑳</sup>の語注参照。○四佳人<sup>中</sup> 文(お文)、若(お若)、鳥(お鳥)、繁(お繁)の四人の芸妓を指し、句中にはその名が詠み込まれている。○文壇<sup>上</sup> 文

人たちの仲間。○ト||さだめる。

〔評釈〕 江東は隅田川の東側であるから、鳥が啼き、芳草生い茂る土地といえ、風光明媚な向島である。当時の向島は、江戸市中に住居する豪商の寮が点在し、清遊する客達を迎える料理屋が繁盛していた。

⑳ 古事記曰ふることふみ此天スメラミコト皇あめの下しろしめしき○素戔ソサノヲノミコト鳴尊くそまり散らし給ひき○きたなき物奉つるとみて大

げつ姫をころし給ひき○などいふ古語あり。しかるに今の世にも猶さまさまの尊たち天くだり給ひて。あやしくしきことどもすくなからず。そのうちにわきてとふとむべきことを次にしるす

放屁安姫命ヒリヤズヒメノミコト

きたなき物たてまつりてくそまりちらし給ひき

箱屋傘主尊ハコヤカラカサノミコト

駒姫のみにめで、天のさか銚下ろし給ひき

秋水穂尊アキノミズホノミコト

こがね姫がきたなき物奉らぬといひて。ヒズまりちらし給ひき

化雷電尊バケイカヅチノミコト

日なし姫にむかひてスメラガオホミコトノリテキコシメセトノタマヒ天皇我勅命乎聞食止宣比ミキドモリオホミコトき

木戸護尊 一本 御木戸守男尊二作ルキドモリノミコト

あまのふみかき姫のきたなきものしろしめしき

不得睡尊ネガサズノミコト

とこ闇に天の火柱を振たてましき

角出姫尊ツノデレノミコト

きたなき物（一本錦の御帳に作ル）たてまつると見てあまの大角をはやし給ひき

衣濯姫尊キヌスギヒメノミコト

八ツひら主の尊より十握劍を授かり給ひき

千日詣尊チカヒマワリノミコト

きたなき物たてまつれといひて興津姫を抱き給ひき

〔語注〕

○素戔嗚尊くそまりちらし給ひき 『古事記』上卷に「素戔嗚尊」天照大御神の縈田つくだの阿を離ち、其の溝を埋め、亦其の大嘗を聞看す殿に屎麻理散らしき。○大げつ姫オホゲツヒメ 大氣津比売。「爾に大氣津比売、鼻口及尻より、種種の味物を取り出して、種種作り具へて進る時に、速須佐之男命、其の態を立ち伺ひて、穢汚して奉進ると為ひて、乃ち其の大氣津比売神を殺しき」(『古事記』上卷)。○あやしくくしきアヤシククシキ 不思議かつ神秘的。○わきてワキテ 別きて。とりわけ。○箱屋ハコヤ 三味線を箱に入れて持ち歩くところからいう。宴席に出る芸者の供をして、三味線などを持つて行く男。春三は甫周をBoxman (箱屋) と呼んでいた(今泉源吉・前掲書三三七頁)ので、箱屋傘主尊は甫周を指しているか。○傘主カサヌシ 雨の日は芸者に傘を差し掛けるのも箱屋の仕事。○駒姫ウマノメ お駒という芸妓を指

すか。三味線の駒から駒は箱屋の縁語でもある。○みと二女性の陰部。○天のさか鉾二この場合は陽物。○秋水二秋水は宇都宮二郎の雅号であるが。○こがね姫二芸妓のお兼を指すか。○ヒズ二ひず。穂出づが変化したもの。穂が出ること。○まり二まる。大小便をすること。○日なし二借金を毎日少しずつ返済していくこと。○木戸護尊 一本 御木戸守男尊二作ル二一本は③③の戯文を指す。○ふみかき二踏み欠くか。踏んでこわす。○とこ二常闇。永久にくらやみであること。○洗濯姫尊二③③、④④に濯娘とある。

【評釈】 作者不明。こういう手の込んだ作は、柳河春三がよくする。序に「今の世にも猶さまさまの尊たち天くだり給ひて」とあるので、洋学者仲間の誰それ、あるいは馴染みの芸妓などを、『古事記』の神々になぞらえて、パロディーに仕立てたものであるうが、難解である。また、なぜスカトロジ一風にしたのかも問題である。さらに③③との関連も見逃せない。

③③ 百化新語拔萃 蓋係追記

蛭化して河豚となる 評曰あきれる哉 Ta.

蝶々化してさゞるとなる 評曰こまる哉 T.

龍化して鯨となる 評曰まだ賣れない哉 K.

涎化して小便しいとなる 評曰やけなる哉 W.

涙化して糞頭はなとなる 評曰かなしい哉 F.

ゲール化してゲロ鼻く涕となる 評曰おそれる哉 Y.

〔語注〕

○蓋係追記 蓋し追記に係る。後から追記したのであろう。○纏頭 是な。芸妓などに与える心付け、祝儀。

〔評釈〕

それぞれの語の末尾にアルファベットがあり、作者の頭文字であろうが、姓なのか、号なのかも分からず、

見当もつかない。六つの語はみな、芸妓へのあてつけのように見えなくもない。「涙化しては纏頭なる」は、嘘泣

きして祝儀をせしめる芸妓であり、「ゲール化してゲロゲロ」も水っ洩を見せて、客の気を引く芸妓の手練手管で

あるから。柳北の側室となったお蝶に持病があり、それを柳北はゲロゲロと呼んでいた。『礼記』「月令」がつりよう篇に「腐

草変為螢」がある。

③1 世はうたてきものとかこちて

唯好朝臣

咲花は数々あれど世のなかに色あるものは櫻山吹

〔語注〕

○うたてし しいとわしい。○かこつ 歎く。○色 物の情趣。風情。○桜山吹 表には花を指すが、裏

には「桜」は一分銀、「山吹」は小判をいうか。

〔評釈〕

人の世はまことに厄介で嘆かわしいものであるが、花を見れば心も慰められる。なかでも桜（一分銀）

と山吹（小判）は、もつとも趣のある、ありがたいものである。

③② 酔後口占

鎖春仙史

満地香風梅占<sub>レ</sub>春

満地の香風 梅 春を占め

一簾微雨鳥呼<sub>レ</sub>人

一簾の微雨 鳥 人を呼ぶ

世間休<sub>レ</sub>問神仙趣

世間 問ふを休めよ 神仙の趣

畢竟神仙屬<sub>二</sub>此身<sub>一</sub>

畢竟 神仙 此の身に属す

神仙指浦島

神仙は浦島を指す

〔語注〕

○口占<sub>二</sub>詩を口ずさむこと。○鎖春仙史<sub>二</sub>『柳橋新誌』初編序の終りに「安政屠維協洽の歳、早梅將に綻びんとするの月、鎖春樓の南軒に書す」とあり、柳北のこと。序が記された当時、柳北の邸は下谷御徒町<sub>（おかちまち）</sub>にあり、

鎖春樓は柳北の書齋の名。屠維は十千の己<sub>（つちのと）</sub>、協洽は十二支の未<sub>（ひつじ）</sub>の異称で安政己未の歳は安政六年。○梅 鳥<sub>二</sub>

芸妓の名を詠み込む。

〔評釈〕 閉門後、三年にわたる屏居を余儀なくされた柳北は、自らを浦島太郎になぞらえていた。注の「神仙指浦島」

はそれを意味する。鎖春もまた屏居を連想させる。心地よい風に梅の花が開き、一雨通り過ぎれば鳥がさえずる

春爛漫の時節に、お梅やお鳥を連れて出掛けたいところだが、屏居の身ではいかんともしがたい。この鬱屈を察

してくれという七言絶句。

③③ 六柱神御意向<sub>（ムハシラノカミタチノミコ、ロユキノハラヒ）</sub> 向祓

タカマノハラニカタトマリマスマヤヨソノミウツハヌシノコトハヒナシヒニニフルキコトカタリまかセタマヒテキタキモクテマツラセトオモヒタマヒキクランノミウツハキリノコトハ  
 高天原ニ神止リ八百萬御器主尊者日成姫ニ古事語聞勢給比而穢物奉羅武比思比宣比神樂女御器護尊者  
 コマヒメニコトヲワタクシクヨロツノコト速ヲウチステカトリツバサシタムコトニヤンノオモヒタマヒキキドモリオノミトハコガチシロカチヲハジメシクガサノ  
 高麗姫ニ絶約ト渡リ九十萬之事打捨唐鳥之翼下筵ニ爲レ武比巖比美比思比給比御木戸護男尊者黃金白銀始ハ種々ノ  
 タカラアツテ而テフミタマフウツクオモヒキナカドノスシノミコトハトホサガミノヤニマシタムオモヒキキドモリオノミトハコガチシロカチヲハジメシクガサノ  
 寶聚ニ文姫登御歌語者思比給比仲殿主尊者遠相模宮ニ在レ皇后近下總ノ宮ニ移レ奉レ思比給比  
 ヲガヤオヤオノコトハハシラカミヲタテキヤトナシツギニキヌスノウハニカシツカレタマハンオモヒタマヒキクテマツラントオモヒタマヒキ  
 御永屋伯父男尊者皇子三柱ノ神登猛神登爲レ次ニ衣濯ノ媼ニ侍給波武登思比給比津比下比總ノ宮ニ移レ奉レ思比給比  
 カマツメニアメタマヒカハカリニカガリナカナタコナタニユバリアフツクハトオモヒタマヒキクテマツラントオモヒタマヒキ  
 神集ニ集給比比神測ニ測給比比彼方此方放尿散給波武登思比給比津比下比總ノ宮ニ移レ奉レ思比給比  
 コノミコトヲ速ニアツツクニカドヒタラシカニヤツノオモヒタマヒキクテマツラントオモヒタマヒキ  
 此御意向ニ天地ノ神會比給比小男志花ノ八津之御耳振立而聞食申須須此六柱神國大御寶如山生思給比

ハナナデノスガキ  
鼻撫宿禰敬白

「語注」 ○六柱神御意向祓ニ祝詞のパロディと考えられる。祓は災禍を払いする宗教的行事のことであるが、  
 ここでは⑳と同じく、洋学者仲間や馴染みの芸妓などを、六種の神名になぞらえた戯文である。○高天原ニ神止利麻  
 須八百萬ニ大祓の次の詞の転用。「高天の原に神留ります、皇親神ろき・神ろみの命もちて、八百萬の神等神集へ  
 集へたまひ、云々」。○日成姫ニ⑳では日なし姫。○高麗姫ニ⑳では駒姫。○絶約ニことど。配偶者との縁を切る  
 ための呪言の意とされる。○九十萬之事ニ九十は尿であろう。穢き物の縁語。○唐鳥ニ⑳に「からとり」の用例  
 あり。○御木戸護男尊ニ⑳では「木戸護尊」。○文姫ニ⑳では「ふみかき姫」。○衣濯の媼ニ⑳の衣濯姫命につな  
 がるか。○駝情羅遠尊ニ遊里で、金錢を湯水のように浪費してあそぶことを、駄駄羅遊びという。○鼻撫宿禰ニ  
 鼻を撫でるクセがあったのは宇都宮三郎らしい。「宇都宮さんもいつものおくせで一本指でお鼻のわきをぐるつと  
 なであげながら」(今泉みね・前掲書二六頁)この項目は<http://home.b-star.jp/~foresta/1/narushimh/itsu1.html/>



伊都満底草の―に負う。

〔評釈〕<sup>29</sup>との関連がきわめて大きい戯文であるが、難解である。

③4 棕鯨説 本草綱目云棕鯨者鯨之牡也

棕鯨者。大魚也。産於南海。其色白而美。形如大鼓。頭生毛髮。其聲類絃。性好遊泳。好食螺貝。及其老大。能嚙小駒。竟化而爲鳥。莊子所謂北溟之鯤。化而爲鳥。徙於南海者。則指此魚耶。

棕鯨の説 本草綱目に云ふ。棕鯨は鯨の牡なり。

棕鯨は、大魚なり。南海に産す。其の色白くして美なり。形は大鼓の如し。頭は毛髪を生じ、其の声は絃に類す。性、遊泳を好み、好んで螺貝らばいを食ふ。其の老大に及ぶや、能く小駒を嚙む。竟に化して鳥と爲る。莊子の謂ふ所の、北溟の鯤、化して鳥と爲り、南海に徙る者は、則ち此の魚を指すか。

〔語注〕 ○作者不明であるが、莊子の「逍遙遊」を踏まえているところから、莊子を敬愛する柳北作であろうか。

○棕鯨 仲間の誰かを指す擬名であろう。○本草綱目 中国の本草書。五二卷。明の李時珍の撰。万歴二四年（一五九六）刊。過去の本草書を整理し、薬の正名を綱、積名を目として、薬となる品目一九〇三種を分類し産地・

形状・処方などを記した書。日本には慶長一二年（一六〇七）伝来、日本の本草学に大きな影響を与えた。もちろん『本草綱目』には、棕鯨も棕鮭もみあたらない。○絃ニ絃の音楽。○螺貝ニらばい。巻貝。ほらがい。ここでは、女性を暗喩しているか。○老大ニ年をとる。○小駒ニお駒という名の芸妓か。○鳥ニ芸妓の名。○北渚の鯤ニ北渚は北にある大きい海。「北渚に魚有り、其の名は鯤。鯤の大きさは幾千里たるか知らざる也」（莊子・逍遙遊）。○南渚ニ南にある大きい海。

〔評釈〕『莊子』の「逍遙遊」のパロディーであるが、棕鮭なるものが判然としない。しかし、③⑧の語注に示したように、甫周を鮭と宛てていることから、甫周の人物像をとらえたものと思われる。ただし、棕の意が分らない。「性、遊泳を好み」は花柳の巷を遊び歩く甫周をさし、「好んで螺貝を食ふ」は女好きを意味している。「其の色は白にして美なり」は、甫周の次女である今泉みねの、父甫周についての回想が参考になる。「私達から見れば、重々しい中にもまたどこか粹のところもあつて、ちよつと役者のように見えることもありました。（中略）いったい奥医は、手足をみがいて、香などたきしめたいいい着物をぞろつと着て駕籠に乗つて歩いていましたから、まるで婦人のようでした。といつて武芸の嗜みが全然なかつたのではありません。ただ公方さまのお手を執るからというので、自分の身はきよめにきよめてあらぶれないようにしていました」（今泉みね・前掲書四六頁）。小駒も鳥も芸妓の名であろう。「其の老大に及ぶや、能く小駒を嚙む」は、食べてしまいたいほどお駒を愛し、「竟に化して鳥と為る」は、とうとうお鳥にまで手を出したということであろう。

③⑤ 唯好の許へ消息のはしに

春 影

千たひ来れども足さへとめずのきの燕歟影ばかり  
風に柳のすなほなぬしにすねる櫻の氣がしれぬ

〔語注〕 ○千は芸妓の名。○燕は千という芸妓の年下の愛人の男を指すか。○風に柳は柳北宛の手紙に添えられているから、柳は柳北をさしている。○桜は芸妓の名か。柳と桜はつきものなのに、どうしてすねるのかという心。

〔評釈〕 春三は多芸なことで知られているが、色里で流行った俗謡の作詞も多く手がけている。共に都々逸の詞であるが、色恋ざたの扱い方も手馴れたものである。春三作の俗謡については、次のような記述がある。「後髪ひかる、方を眺むれば駒形あたり有明の 月が鳴いたと思ひしは誰を待乳の杜鵑 今一聲の聞きたさにまたも乗込む山谷堀 といふのがあり、眞に一唱三嘆の妙がある。かへりなむいざとはいへど綾錦 たまくをしき花のかげかな 春影。この句の綾錦といふのは吉原に於ける寵娼の名である。四手駕で吉原から開成所へ出勤した頃の作である」。(尾佐竹猛・前掲書九七頁)

③6 五月雨ふる比よめる

早 樹

から傘の末廣がりし借金をいつかさぼめん五月雨の比

〔語注〕 ○いつかすぼめん〓広げた傘をすぼめるように、嵩んだ借金を返せるだろう、五月雨のころには、という意。

〔評釈〕 甫周の家の経済事情はかなり厳しかったようで、後出するエピソードにも見られる。

③7 戯によめりける

唯好

世の中を屁とも思はぬ連中はPとBとで日を暮すなり

〔語注〕

○PとB〓Pはプラムで梅、Bはバードで鳥。ともに柳北や仲間の馴染みの芸妓の名。

③8 戯寄柳月両先生

戯れに柳・月両先生に寄す

喫霞仙史

六々樓頭遇美人

六々樓頭 美人に遇ふ

愁容可掬涙沾巾

愁容 掬すべし 涙 巾を沾す

慇懃囑我煩傳語

慇懃 我に囑して 伝語を煩はす

道是蕭郎薄倖人

道ふ是れ 蕭郎は 薄倖の人と

蕭郎は誰と尋ねしに、只 an animal とのみ答申し候。再び鴨と鮭の區別を問ひ候暇なく候。何れ二

種の内と存候。

〔語注〕 ○柳月両先生 柳北と月池（桂川甫周）。○六々楼 隅田川畔の料亭。この詩の詠まれた五年前の『硯北日録』万延元年六月十六日に次のような記事を見る。

此の日盤溪及び遠木堂・桂月池・本梅顛来り酌む。午飢して舟を放ち澤に遊ぶ。二喬これに陪す。六々楼に上り詩賦有り。月白く風清く絶叫の景也。

盤溪は大槻盤溪（儒者）、遠木堂は遠木田木堂（幕府医官）、桂月池は桂川甫周、本梅顛は未詳。二喬は柳北の愛人で喬氏と記されたお蝶と、その妹分の小喬と記された芸妓。

○美人 顔見知りの芸妓。○愁容 悲しむ容子。愁い顔。○慇懃 男女の思慕の情。○蕭郎 愛する男のこと。

○鴨と鮭 ともに仲間内の人物のニックネームであろうが、柳月両先生に寄せた詩であるから、鴨は柳北、鮭は甫周というところであろう。○薄倖の人 浮気者。薄情者。

〔評釈〕 美人の愁い顔くらい男心をそそるものはない。つい、ちよつかいを出したくなるのだ。あの人に言づてをしてくださらないと頼まれたので、その色男は誰なんだい、と尋ねた。すると、美人がアン アニマルとだけ答えたというのが、当時としては、洋学者たちの仲間内にだけ通じる楽屋落ちである。薄倖の人は、可哀そうな人ではなく、浮気者の意で、杜牧「遺懷」の「落魄江湖載酒行 楚腰纖細掌中輕 十年一夢揚州夢 贏得青樓薄倖名」を踏まえる。揚州の歡樂街に遊ぶこと三年。往時を懐古した晩唐の詩人杜牧の絶唱である。幕末の柳暗の地に出遊する三人の洋学者たち。柳北、甫周の両先生を伊達男に仕立て、杜牧を気取つて詩を吟じる春二。『伊

『都満底草』には、この三人の遊びを通した男の友情のアトモスフェアがただよっている。

③9 寄二濯娘一

濯娘たくじょうに寄す

多喜子

生憎水老妬二情縁一

生憎あやしくす 水老の情縁を妬むを

香夢無レ端忽杳然

香夢 端無くも 忽ち杳然

莫レ説蕭郎在二天外一

説く莫れ 蕭郎 天外に在るを

旅魂泊レ月柳橋邊

旅魂 月に泊す 柳橋の辺

自註云、かく書してヘルニ贈ラントス。恨ラクハシー解セサルヲ

〔語注〕

○濯娘たくじょうは濯娘とは誰か。濯はあらう、すすぐの意であるが、濯濯には、なまめかしく美しいさま、姿のみやびやかで美しいさまの意がある。名前は特定できないが、水品楽太郎の馴染みの美人の芸妓を指すか。③3の戯文には「衣濯之媼」という表現が見えている。○多喜子タキコは幕臣水品楽太郎。水品楽太郎は、外国奉行支配組頭。水品はかつて文久二年（一八六二）、江戸・大坂・兵庫・新潟の開市・開港の延期をヨーロッパ諸国に認めさせることを主目的にした訪欧使節団の随員（外国奉行支配調役並）であった。この詩を詠んだこの時は、横須賀製鉄所設立準備のため、水品は二度目の外遊でパリにいた。パリから甫周に宛てた手紙がある。次の証言もある。「水品さんは（中略）父とはごく親しく、「多喜さん」とか「多喜次郎」とか「多喜兒タキキ」とか渾名でよんで……」（今泉

みね・前掲書四〇頁)。○生憎<sup>レ</sup>思い通りにならない。意地悪い。○氷老<sup>レ</sup>月下老と氷上人。ともに縁結びの神、仲人の意。○杳然<sup>レ</sup>はるかなさま。○蕭郎<sup>レ</sup>愛人の男。○ヘル<sup>レ</sup>オランダ語でミスターの意。○シー<sup>レ</sup>英語の she。

〔評釈〕 自註にあるとおり、パリに滞在中の水晶樂太郎が愛人の濯姫に寄せた纏綿たる慕情を七言絶句に仕立て、甫周宛の手紙に添えた。甫周宛の水晶の手紙を摘録する。(『桂川の人々』461頁)

小子儀今十七日当巴里に着仕候。航中無恙御放念可被下候。真じめ之事ハ既ニ誰園大家江書送せしなれば爰ニ贅せず。扨近來風流事情之御得意如何。ミッシス竹婦人と御接待振巨細之御様子伺度。云々。

また、

濯氏近日如何なる状を成す哉甚憶に往来せり。不相替君等之愛顧を得るならん。僕亦乞ふ、シー若君等之意趣ニ戻る事あらバ、宜敷教諭叱咤し給へ。決、棄て給ふ勿れ。然れとも路傍之花柳、胡堪攀折。故ニ僕必しもシーの爲に乞わず。君必僕之負惜みなるを咲ひ給はん。ポットアイ ドントケール (But I don't care)。

なお、「真じめ之事ハ既に誰園大家江書送せしなれば奚ニ贅せず」とあつて、柳北にもパリから手紙が出されていた。甫周には、まず甫周の愛人である「ミッシス竹婦人」<sup>レ</sup>お竹への御機嫌伺いを、そつなく記した後、本題ともいふべき水晶の愛人濯姫への切々たる恋情を吐露している。それにしても、この詩は甫周宛ての手紙に書かれていたのであるから、『伊都満底草』に録されているということは、水晶の書簡を、柳北と甫周の二人は互いに見せ合っていたことになる。

④〇 答「多喜子」

多喜子に答ふ

濯 娘

好因縁似悪因縁 好き因縁は 悪しき因縁に似たり

鴈北燕南心悵然 鴈は北へ 燕は南へ 心 悵然たり

人道蕭郎甚薄倖 人は言ふ 蕭郎 甚だ薄倖と

別來夢落阿誰邊 別來 夢は落つ 阿誰の辺

自註云蕭郎多情ニシテ油斷カナラヌ

〔語注〕 ○鴈北燕南〓雁が北に渡り、燕が南に赴くように、旅の境遇にあること。○悵然〓なげくさま。○蕭郎

〓水品楽太郎のこと。○薄倖〓浮気者。

〔評釈〕 惚れたが因果というものの、お互いに遠く離ればなれの身の上、あの人が浮気者なのは今更だけど、一体どなたの夢を見ているのかしらん。これを濯娘の作とするが、③⑨の詩の自註に「恨ラクハシー解セサルヲ」とあるように、本人の作ではなく、甫周あたりの代作であろう。水品の恋情に対して、からかい半分に代作をする甫周。「蕭郎多情ニシテ油斷ガナラヌ」などと自註させて、芸の細かいところを見せつつ、仲間内ならではの諧謔を弄している。

④① 對語新聞 日本千八百六十五年五月



a b cをしらぬおやじゲレートマスターヲ縛らんと欲す

芝居をそこねし婆ばあ木戸番を殺さんと謀る

息を切て仲どん四分の一をみがく

夜を深してねへさんパスを闘はず

大盡を怒ておいらん始て木登りをなす

藪醫者をやめて坊さん新に竹細工を習ふ

一つかみのぬか能く鬼の目をつぶし

一疋の蛟たくみに龜の甲を奪ふ

〔語注〕 ○対語Ⅱ対になつた言葉。対句に同じ。○新聞Ⅱ新しく聞いた話題。○日本千八百六十五年Ⅱ慶応元年。

○ゲレートマスターⅡゲレートマスターか。○パスⅡ未詳。○蛟Ⅱみずち。水の靈の意。蛇に似た想像上の動物。

〔評釈〕 作者名なし。仲間内の話題を二句ずつの対句に寓したのであるが、寓意を解しがたい。

④2 述懐

早 樹

呉竹<sup>||</sup>のうきふし茂き世の中をよそにのみして澄る月影

〔語注〕 ○呉竹<sup>||</sup>はちく（淡竹）の異称。呉竹の、には、呉竹の節（よ）の意味があり、世、夜、よるに掛かる。節を「ふし」と読む場合は、ふし、伏、伏見に掛かる。ここは、甫周の情人である芸妓お竹を寓意する。

全

江東第一風流地 江東 第一 風流の地

涼宵時擁竹夫人 涼宵 時に擁す 竹夫人

評曰時當<sup>レ</sup>作<sup>レ</sup>須、或<sup>二</sup>云作<sup>レ</sup>未稍可

評に曰ふ、時は当に須に作るべしと。或は云ふ、未に作るも稍可なりと。

〔語注〕 ○竹夫人<sup>||</sup>暑中に寝るとき用いる抱き籠。お竹を掛ける。

江東第一風流地 江東 第一 風流の地  
第一才名屬「阿誰」 第一の才名 阿誰に属す

小逋仙

〔語注〕 ○小逋仙トトシは、宋の詩人で西湖の孤山に隱棲した林逋を意味するので、この時点で隱棲している柳北を指しているとみてよからう。○阿誰アタリだれ。

〔評釈〕 甫周の愛人お竹を詠み込んだ和歌。浮き沈みの多い世の中であるが、それは恋の浮き沈みも変りはない、そんな俗世を知らぬげに、月は冴え渡っている。その和歌に、甫周は漢詩の一聯をつけた。折角の江東一の風流な地にながら、お竹ならぬ竹の抱き枕を抱いて、涼風の通りぬける宵に、身を横たえている、というのである。これに柳北が評をつけた。「時」の字を「須」に変えて、「須く擁すべし竹夫人」とするか、「未」に変えて、「未だ擁せず竹夫人」でも良からうとしている。この甫周の作に対し、柳北はその江東一の風流の地に一番似あいの才子はどなたなんでしょうと、返している。

④③ 唯好ぬしのもとより五月雨の降りつゞきしころかきくれて晴ぬ思ひと聞えし御返し 學 子

五月雨もいつしか晴てすむ月の光をみがく和歌の浦人

と祈り申候

唯好謹而白ス至極むまきはなしの様に候へども六十あまりの老宮娃きゆうわい御推もじく

〔語注〕 ○學子ガクシは柳北は謹みて申すとして、返しの歌の作者は、六十あまりの老宮娃きゆうわい（宮中に仕える美女）としているが、たとえば柳北が益暮トクヨに挨拶に出向くような関係がある、御三卿の一つ田安家に仕える老女などが考え

られるか。○かきくれて〓空がすっかり暗くなって。心が暗くなって。○みがく〓磨く。○御推もじ〓御す文字。「すもじ」は「す」で始まる言葉の後半を略し、「文字」をそえたもの。女房詞「すもじ」の丁寧語。この場合は、御推察の意。

〔評釈〕 唯好謹みて申ス云々とあつて、御推もじが使われているところから、巻ごとに「伊都満底草」が回覧されていた可能性もあるのではないか。④の「対語新聞」が五月の日付になっており、④③の和歌に五月雨が入っている。巻の一は正月元旦から、五ヶ月にわたる例会の記録になる。

参考文献

成島柳北『柳北全集』文芸倶楽部第三卷第九編臨時増刊 博文館

一八九七年

成島柳北『花月新誌』第十七号 花月社 一八七七年

揖斐高『江戸の文人サロン』吉川弘文館 二〇〇九年

今泉源吉『蘭学の家 桂川の人々』『最終篇』篠崎書林 一九六九年

前田愛『成島柳北』朝日選書 朝日新聞社 一九九〇年

今泉みね『名ごりの夢』東洋文庫 一九六三年

大島隆一『柳北談叢』昭和刊行会 一九四三年

芳賀徹『大君の使節』中公新書 中央公論社 一九六八年

尾佐竹猛『新聞雑誌の創始者 柳川春三』近代日本学芸資料叢書

第九輯 湖北社 一九八五年